

香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東碧

白居易

日高睡足猶慵起

日高く 睡り足るも 猶お起くるに慵し

小閣重衾不怕寒

小閣に衾を重ねて 寒きを怕れず

遺愛寺鐘欵枕聴

遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴き

香炉峰雪撥簾看

香炉峰の雪は 簾を撥げて看る

匡廬便是逃名地

匡廬は 便ち是れ名を逃るるの地

司馬仍為送老官

司馬は 仍お老を送るの官たり

心泰身寧是歸處

心泰く身寧きは 是れ帰する處

故郷何獨在長安

故郷 何ぞ独り長安にのみ在らんや

太陽が昇り、十分に眠ったが、まだ起きるのがおっくうだ。

ささやかな住まいだが、夜具を重ねれば寒くはない。

遺愛寺の鐘は、頭を枕につけたまま聞き入り、

香炉峰の雪は、簾を巻き上げて見る。

この廬山は、世間の名声から逃れるにはふさわしい土地であり、

今の仕事の司馬は、老後を送るのに都合のよい官職である。

心も体も安らかに暮らせるところこそ、最終的に身を落ち着かせる場所

故郷は、どうして長安だけに限ろうか。

《香炉峰》廬山（江西省九江市）の北の峰。香炉に似ていたことからの命名。

《ト》占う。土地の吉凶を占い、住居を定めること。

《山居》山中の住まい。

《草堂》粗末な家。

《偶題》思いつくまま書きつける。

《遺愛寺》香炉峰の北側にあった寺。

《匡廬》廬山の別名。

《司馬》本来は州の長官の補佐役だが、当時は閑職とみなされていた。

白居易（七七二―八四六）は字を楽天といい、二十八歳で進士に及第して役人となり、途中でこの詩を詠んだ潯陽に左遷されましたが、刑部尚書（法務大臣）にまで出世しました。

潯陽に左遷されたのは四十四歳の時で、江州司馬という官職を与えられます。司馬は軍事・警察を司る職ですが、実は左遷された役人が就く閑職です。

もうすでに日は高く、都であればとうに出仕の時間であるにもかかわらず、朝寝を楽しんでいます。白楽天は左遷された江州での日常をうたいます。都での生活と較べればこうした生活が作者の意に合うものであることを述べていきます。遺愛寺の鐘と香炉峰の雪。視覚と聴覚による感覚の充足を述べています。この一節は清少納言の「枕草子」（一九九段）に、「香炉峰の雪はいかならん」という中宮の仰せに対して、清少納言が御簾を上げてお答えしたという文章がありますが、この詩が典拠となっています。

詩の後半は白居易が左遷された境遇における意味を考えています。匡廬とは昔、匡という隠者が廬山に庵をかまえていたのでこういっています。仕事はこれといってなく、都の価値観や出世に汲々とすることもなく、白楽天は自分らしさを取り戻せ、老年を送るには充分な官職だと考えます。住まいよし、仕事もよしで、心が泰らかで身が寧らかということが究極の目的ではないか。帰する処とは、つまり人間としての帰着点を意味します。ですから故郷はどうして都の長安にばかりあるのだろう。これも故郷みたいなものだ。と結びます。

左遷されたものは長安に帰りたいのが常です。白居易はそれをふまえて、私は違うぞ、ここでの生活が非常に気に入って、むしろ老年をここで送ってもいいのだ。と悟りすましたような心境を述べています。しかし実際はエリートであるはずの自分が左遷された本当の心境は別のようにも思えます。事実、その後まだまだ波乱に富んだ人生が待ち受けていて、ここで老年の生活を送ったわけではありませんでした。

います。そして、それをマスターすると「流  
れ」出て自然成長的に行書や草書になるとい

律<sup>りつめく</sup>回り歳<sup>としく</sup>晩<sup>ひやうちゆう</sup>れて 氷霜<sup>ひようそう</sup>少<sup>すく</sup>なし 春<sup>しん</sup>人<sup>じん</sup>間<sup>かん</sup>に到<sup>いた</sup>らば 草<sup>そう</sup>木<sup>もく</sup>知<sup>ち</sup>る 便<sup>た</sup>ち<sup>た</sup>覺<sup>かく</sup>ゆ 眼<sup>がん</sup>前<sup>ぜん</sup>に生<sup>せい</sup>意<sup>い</sup>満<sup>まん</sup>つるを 東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>水<sup>すい</sup>を吹<sup>ふ</sup>き 緑<sup>りく</sup>参<sup>さん</sup>差<sup>さ</sup>たり

律<sup>りつめく</sup>山<sup>さん</sup>歳<sup>さい</sup>晩<sup>ばん</sup> 氷<sup>ひよう</sup>霜<sup>そう</sup>少<sup>すく</sup> 春<sup>しん</sup>人<sup>じん</sup>間<sup>かん</sup> 草<sup>そう</sup>木<sup>もく</sup>知<sup>ち</sup>る 便<sup>た</sup>ち<sup>た</sup>覺<sup>かく</sup>ゆ 眼<sup>がん</sup>前<sup>ぜん</sup> 生<sup>せい</sup>意<sup>い</sup>満<sup>まん</sup>つるを 東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup> 水<sup>すい</sup>を吹<sup>ふ</sup>き 緑<sup>りく</sup>参<sup>さん</sup>差<sup>さ</sup>たり

張<sup>ちやう</sup>杖<sup>じやう</sup>詩<sup>し</sup> 立<sup>たつ</sup>春<sup>しゆん</sup>偶<sup>ぐ</sup>成<sup>じやう</sup> 張<sup>ちやう</sup>杖<sup>じやう</sup>書<sup>しよ</sup>

《大意》 暦<sup>れき</sup>め<sup>め</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>つて 歳<sup>さい</sup>が暮<sup>くれ</sup>れ、 氷<sup>ひよう</sup>や霜<sup>そう</sup>も少<sup>すく</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>た。 春<sup>しゆん</sup>が地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>にや<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>ると、 ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>さ<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>に草<sup>そう</sup>や木<sup>もく</sup>がそ<sup>そ</sup>の気<sup>き</sup>配<sup>はい</sup>を察<sup>さつ</sup>知<sup>ち</sup>し、 た<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>に生<sup>せい</sup>気<sup>き</sup>が漲<sup>たう</sup>つ<sup>つ</sup>てくる<sup>く</sup>の<sup>の</sup>がわ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>る。 東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>が水<sup>すい</sup>面<sup>めん</sup>に吹<sup>ふ</sup>き<sup>き</sup>わ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>り、 緑<sup>りく</sup>色<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>な波<sup>なみ</sup>紋<sup>もん</sup>が浮<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ぶ。 (張<sup>ちやう</sup>杖<sup>じやう</sup>詩<sup>し</sup>・立<sup>たつ</sup>春<sup>しゆん</sup>偶<sup>ぐ</sup>成<sup>じやう</sup>)

春<sup>しゆん</sup>情<sup>じやう</sup>柳<sup>りゆう</sup>色<sup>しき</sup>を寄<sup>よ</sup>せ 鳥<sup>とり</sup>語<sup>ご</sup>梅<sup>ばい</sup>中<sup>ちゆう</sup>に出<sup>い</sup>ず

春<sup>しゆん</sup>情<sup>じやう</sup>寄<sup>よ</sup>柳<sup>りゆう</sup>色<sup>しき</sup>  
鳥<sup>とり</sup>語<sup>ご</sup>出<sup>い</sup>梅<sup>ばい</sup>中<sup>ちゆう</sup>

張<sup>ちやう</sup>杖<sup>じやう</sup>書<sup>しよ</sup>

《大意》 春<sup>しゆん</sup>のおも<sup>も</sup>いは柳<sup>りゆう</sup>の<sup>の</sup>色<sup>しき</sup>の中<sup>ちゆう</sup>にや<sup>や</sup>ど<sup>ど</sup>り、 鳥<sup>とり</sup>のさ<sup>さ</sup>え<sup>え</sup>ず<sup>ず</sup>り<sup>り</sup>は梅<sup>ばい</sup>の中<sup>ちゆう</sup>か<sup>か</sup>ら聞<sup>き</sup>こ<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>くる。 (蕭<sup>しやう</sup>子<sup>し</sup>範<sup>はん</sup>)

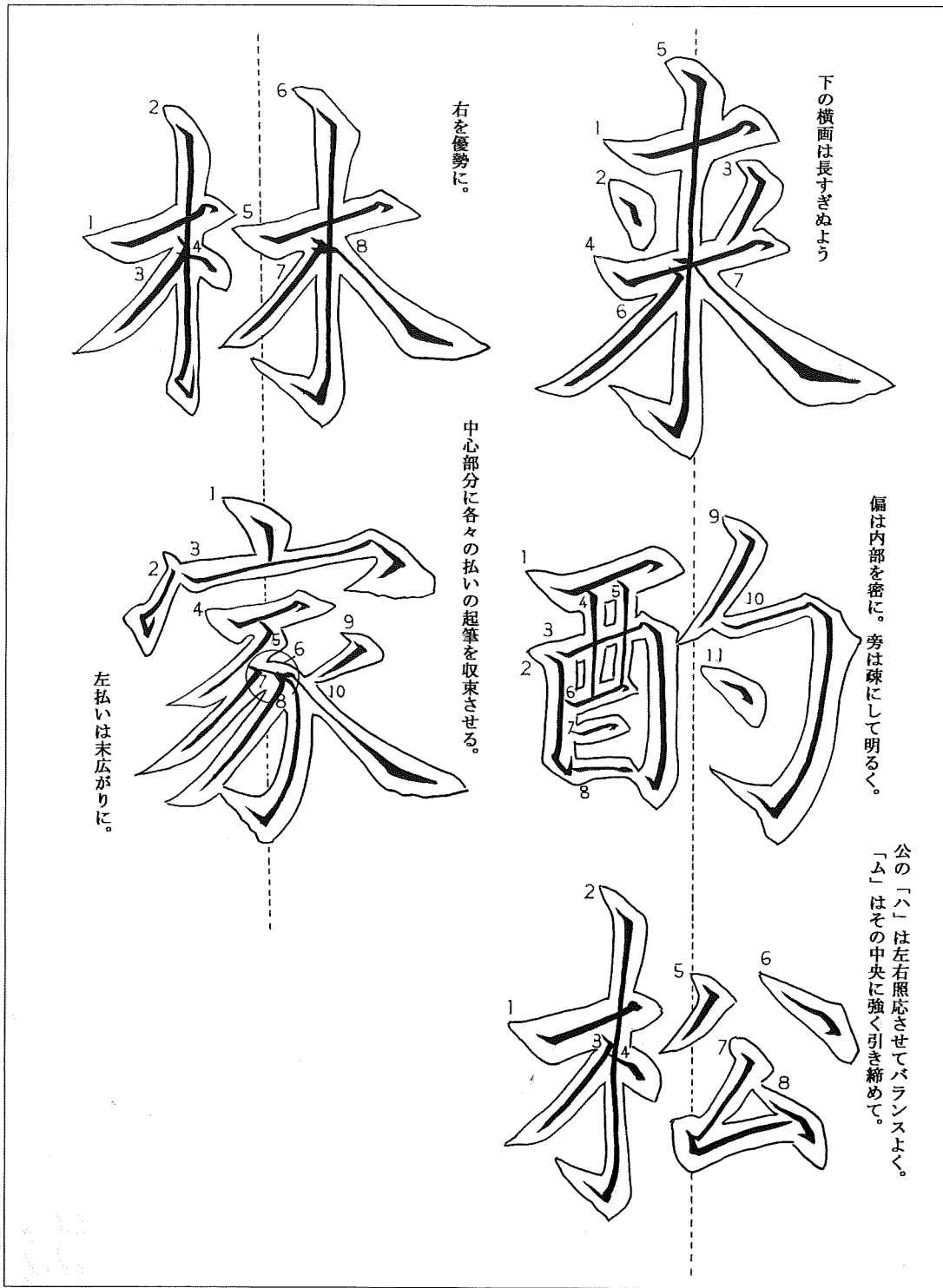
春<sup>しゆん</sup>情<sup>じやう</sup>寄<sup>よ</sup>柳<sup>りゆう</sup>色<sup>しき</sup>  
鳥<sup>とり</sup>語<sup>ご</sup>出<sup>い</sup>梅<sup>ばい</sup>中<sup>ちゆう</sup>

蕭<sup>しやう</sup>子<sup>し</sup>範<sup>はん</sup>書<sup>しよ</sup>

来 酌  
松 家

読み 来たりて酌む松林の家（松林の中の家で酒を酌み交わす）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

「菊池溪琴詩・山中」

我有一壺酒

我来酌松林家

对客鼓七絃

客に対して七絃を鼓し

玉露湿烏紗

玉露 烏紗を湿す

孤鶴杳無跡

孤鶴 杳として跡無し

天風落桂花

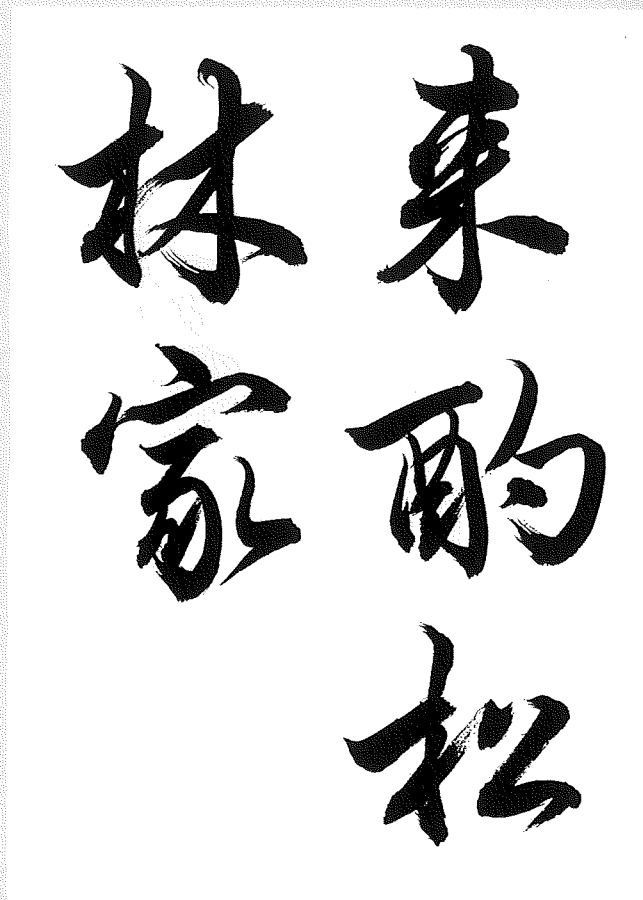
天風 桂花を落とす

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。



次号課題

隸書



客に對して七絃を鼓し

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切三月二日(土)・受験料三,〇〇〇円(税込)

音

ヘイシヤボウケイ  
コウチヨウタイエイ

略解

宮殿にある家は門を開いて往来するようにつくられ  
とばりは柱にかけられて、その美しさは眼もさめるようだ。

丙 舎 傍 啓 甲 帳 對 楹  
 丙 舎 傍 啓 甲 帳 對 楹  
 丙 舎 傍 啓 甲 帳 對 楹

※今月の月例出品はお休みです。

佐藤象雲書

支部		順位		氏名	
	ニノ月ヤ				
	天神様の梅の花				

小林一茶

和泉溪石先生書

仙露明珠

仙露明珠……

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年)の臨書(46)

象雲臨

「仙露明珠」

「仙露」とは、仙人が不老不死を得ることができるといふ天から降る甘い露。「明珠」とは明るく輝く真珠のことです。仏典を西域から持ち帰った玄奘法師を称して、この「仙露明珠」も及ばないと、太宗はその功績を讃えている文言です。

「仙」扁平な概形。山の左右の空間の差と、線質の違いを捉えたい。

「露」画数が多いため、外形も大きい。雨冠は扁平にして、幅は下部の路に譲っている。路は細線ながら強く小気味良い。各線のぶつかり合いを避けて空間を設けているため、繁画ながら明るくすっきりとしている。

「明」偏旁の幅はほぼ同じ。中心を広く開けて、各々の横画を照応させている。

「珠」王偏の幅は狭く、旁の朱を暢びやかに作っている。最後の右払いの起筆位置が絶妙。王偏の第四画とで字のバランスを保っている。

仙露明珠



驚蛇驚之態

驚舞蛇驚(之態)……

■孫過庭・書譜(初唐・西曆六八七年)の臨書(28)

象雲臨

驚蛇驚之態

【驚舞蛇驚】

「驚舞蛇驚之態(おとりが舞いあがり、蛇が何かに驚き走り出すような姿)」は、書の生動の様を形容して、古来の名蹟が自然の靈妙な働きと同じであることを述べています。この四文字は、細線でゆったりと円転して穏やかです。特にこの後に続く部分が側筆を交えて、面的な線が主体となっているために、しなやかな細線が顕著で印象的です。

【驚】右旋回を繰り返しながら、線が破綻せず筆が進んでいる。筆鋒を起こすことが大切。

【舞】終筆の懸針は、筆圧を保ったまま鋭く引き下している。ゆっくりと。

【蛇】四文字の中で唯一扁平で、偏から旁への斜めの線は力強い。

【驚】繊細な線。筆先を起こして弾力を利かせた運筆を。原帖よりやや太くなくても、筆を浮かせて弱い線にならないよう。